

Pl. を境にして異教古代で世界永続説が主流を占めるようになったとすれば、*Tim.* は歴史的には宇宙の秩序を生成論的に説明するコスモゴニアーからそれを存在論的な方向で説明するコスモロギアーへの転換をもたらしたものとしてとらえることができるであろう。*Tim.* をこのようにとらえるとき、*Tim.* 宇宙論の歴史的生成過程と展開過程の問題が生じてくるが、著者の上下2部からなる研究はこのうちの展開過程の研究に属するものとして位置づけられる。著者はあくまで現存資料に忠実にあたりながら *Tim.* の世界生成の問題に関する解釈史・論争史の実態の内在的解明に全力を傾けている。本研究はまた資料集の性格をもそなえていると言ってよく、*Tim.* 解釈史研究のみならず、広くプラトニズムの展開の研究、また *Tim.* そのものの解釈をおこなううえでも今後に資するところきわめて大であると言わなければならない。現在 Münster に勤める著者からの連絡によると第1部で予告されたプロティノスまでの包括的な *Tim.* 解釈史研究の刊行は遅れるそうであるが本研究におとらずそれが内容充実したものになることを期待してやまない。

John Hick : *Evil and the God of Love*

2nd ed. The Macmillan Press LTD

1977. pp. xiii+389

荒 井 洋 一

1 〔問題〕もし神が世界を創ったのだとすると、どうしてそこに悪は在るのかとつぶやいてみる。もし神が全善 (summum bonum) であるならば、すべての悪を取り除こうと欲するはずであり、もし神が全能 (omnipotens) であるならば、すべての悪を取り除くことができなければならないはずだ。

しかし悪は在る。

神が創った世界の中に悪は現に在るように見える。

とすると神の全善と全能の仮定のどちらかが疑われるのだろうか。

いや、そうではない。

神が全善であり、全能であることは疑われ得ない。神の全善と全能の仮定のどちらかへの疑問はただちに神の存在それ自体への疑問に導いていくだろう。

すべての Christian は神が在ることを信じている。そして同時に神が全善であり、全能であることを信じている。

だとすると、悪はどこから来るのか、悪とは何なのか、という問題が生じる。

この問題が本書の中で Hick (以下Hとする) の取り扱う問題である(pp. 3-4)。

「西方における長い時間をかけたゆっくりとした宗教的な制度の衰退にもかかわらず」とHは本書の第二版の序文において書いている。「神が一体在るのかないのかという問題を中心とする信仰の問題には依然として高い関心がはらわれつつけている。」そして「この問題についての議論と討論においては、悪の問題は決定的な位置を占めつつけているのである。」(p. xi)

この悪の問題は dilemma の形で書き換えることができよう。それは、一方で、全善にして全能である神への信仰と、他方で、神が創った世界の中に現に在るように見える悪という事実とが形成する dilemma である (p. 5.)。

2 「現代的意義」このような悪の問題は、それでは、或る意味で現代ばなれをした問題なのであろうか。もしも現代という時代を特徴づける知的な市民たちがもはや Christian believers ではなく、不可知論者であるか、懐疑論者であるか、ないしは humanist であるのだとすると (p. x)。

本書は、しかし、それらの人々にも向けて書かれたものである、とHは言う。本書の内容を theodicy とHは名づけるが (p. 6), それをめざしていることは、Christianity が真であることを論証することではなくて、悪という事実も Christianity が偽であることを示さないことを論証することである。そこで本書の論証は positive な機能というよりは negative な機能を持つというふうに性格づけられる (p. 244)。

3 「基本的立場」Hはみずからの立場を理性的な信仰 (rational belief) として規定するが、その意味はけっして理性的な論証によって到達された神への信仰ということではない。そうではなくして「理性的な個人々のうちに、彼の経験におけるやむにやまれない要素に応じて呼び起こされてきた信仰」(p. 244) を、それは意味

しているのである。E. Gilson が中世哲学の原理と呼んだ、あの有名な Anselmus の定式 *faith seeking understanding* がその付近の記述に見える。「悪という神秘はほとんど把握されずに残されるにしても、それは宗教的な経験の流れに参与することから呼び起こされてきた信仰を非理性的なものにしない。」(p. 245) そこでHは、悪という深刻な事態に直面した上で、神が世界を創ったことの意味を探っていくようにすることになる。

4 〔構成〕本書の a full descriptive title は次のとおりである。すなわち「キリスト教思想の中で発展してきた、悪の問題に対する二つの応答の批判的研究と、今日のための弁神論を組織的に述べる試み。」(p. 3) ここで二つの応答と言うのは Augustinus (以下Aとする) と Irenaeus の応答のことを指しているのである。そこで本書は大きく分けて、A型の弁神論研究 (pp. 162) と Irenaeus 型の弁神論研究 (pp. 40) と今日のための弁神論 (pp. 144) から成り立っている。このさいごの part においては、Irenaeus 研究の成果にもとづくA的な原罪説の批判が述べられている。そして Adam と Eve 以来の人類の歴史を、小さな子供が (p. 212) だんだんと成長し発展していく歴史として、前向きに (p. 174)、また personal に (p. 196) とらえなおす試みが大胆に述べられていて、本書の機軸の一つをなすのであるが、この書評では Irenaeus 型によるA型の補完という問題は取り上げない。

5 〔探求〕およそ存在するものは (material な level を含めて) 存在する限りにおいて善い、というのはAの基本命題の一つである (p. 44)。悪をなす (male facere) とは何かというと、それはそれ自体においては善い存在者の malfunctioning であるということになる (p. 46)。すべての存在者は、神によって創られているために、本来善いのであるが、無から創られているために、可変的であり、そこなわれることができる。悪 (malum) とは善がそこなわれていくこと (privatio boni) である。Aはこの privatio を言い換えて、deprivatio, corruptio, amissio など実にさまざまに言い表わしている。

ここで評者は『自由意思論』における ordo にてらして、Hの言うところを検討してみよう。

HはAにおける存在と善の一致の原理を指摘して、「最高の善はもっとも強烈に現実的な存在を持っている。(あるいはそのような存在である。)そして善の段階が

減少していくと、同時に、存在の段階も減少していく」と言っているが(p.49)、まさにそのような存在の段階を言い表わすAの用法として *magis esse* や *minus esse* が あったということは E. Z. Brunn の指摘するところである (*Le dilemme de l'être et du néant chez saint Augustin, Études Augustiniennes. 1969.*)。この存在の段階というのは、私たちの存在の用法と必ずしも無縁でないことを、Hはもっぱら *esse* の場面で説明しようとするのであるが、ここではむしろ *vivere* の場面で説明した方が明確になったように思う。すなわち、私たちは一般に或る人は生きているかいないかのどちらかであって中間的な段階はないとも言える(用法1)が、他方また或る人がよりよく生きるとも言える(用法2)。この用法2こそがAの用法との連結点であると思われる。

しかしなぜ存在することは善いのであろうか。

存在するものは、全善である神によって在らしめられているがゆえに、善いのであろうか。

Hはその説明方式を *theological* と呼び、Aにはこの点についての哲学的な論証はないと言って (p.171)、たとえば『自由意志論』III, xiii, 36. や『告白』VII, xii, 18. の論証を無視する。そして Thomas の論証を紹介するが、それも不十分だとする。一般に存在することは、存在するものそれ自身にとって、善い。しかしその善いことは、当の存在するものそれ自身にとってという限定つきで言われるにすぎないと言うのである。

Hはまた *privatio boni* 説の *logical* な基盤を探っていこうとする (p.53)。

今ここに水が半分はいった *glass* があるとする。それは半分空になった *glass* とも言える。*privatio boni* 説は、このような種類の、相互に対立する *term* の一方を消して他方だけで言い表わしていこうとする *optimistic vocabulary* の *recomendation* にすぎないのだろうか。Hはこの場面で——『善の本性について』xv を考慮に入れるべきであったが、そうせずに——*privatio boni* 説は *metaphysical* な主張であって、*empirical* な主張ではないとする。すなわちこの説が主張していることは、悪は神によって創られなかったということであり、神の創った世界における悪の *status* は *essential* であるというよりは *parasitic* であるということである、と言う。他方経験論的に見た場合、悪はけっして単なる欠如ではなく、それ

自身の恐るべき力を持った reality であると言って、natural evil の場合と moral evil の場合の分析を行なっているが、評者はこの点については反対である。

確かに巨大な悪の力が猛威をふるうという言い方をする。また猖獗をきわめるとも言う。しかし結局のところ、それは破壊活動にすぎないのではないだろうか。また、巨大な悪が遂行されるための要件としてHがあげている mental integration, stability, coherence, intelligence……などは、どれもみな、それ自体としては善なのではないだろうか。すなわち巨大な悪の力の源泉はやはり善なのであって、善からして、或る善をめざして、自他を破壊する過程が悪なのではないか、と評者には思われるしだいである。

6 [問題] Hはさいごまで悪が、経験論的には、sheerly malevolent reality であるという立場を保持して (p. 359), それと神との関係を探っていこうとする (p. 352)。

cruelty, violence, poverty, hunger, disease, insanity など (p. 243) が私たちの生きているこの世界に影をおとしている。

ちょうど暗闇が描かれることによって絵画の美が達成されるように、罪人によってすら世界の美は達成されるというAの比喩は適用されるであろうか (p. 87) 罪人は、では、世界の完成のために必要だったのだろうか。

いや、そうではない。

そこまで言ったとすると、完成されるべき世界そのものが疑問になってくるだろう。Aもそこまでは言わなかった (p. 88)。

しかし、それにもかかわらず、神は罪人を神の目的のために用いると言わねばならない。

Hは最終的に、「神の意に反して」と「神の意にかなって」という区別をする (p. 355)。たとえば Jesus の死は、それ自体としては、神の意に反して、人間の邪悪さによってもたらされたのであるが、Jesus の死は、無限の未来の善にてらして (p. 340), 神の意にかなってもたらされたのであると言う。Hは前者を二元論的な見方 (p. 353) とか経験の立場 (p. 359) と呼び、後者を一元論的な見方とか信仰の立場と呼ぶ。「このうちの一方は reality なのであり、他方は appearance なのであろうか。悪は実際には善いのであるが、悪く見えるだけなのだろうか。それとも

悪は実際に悪いのであるが、思弁的な理論によって善く見えるだけなのだろうか。」(p.362) Hは両者の関係の問題を残して、その懸け橋は神の国への希望であると言う。そしてこの paradox は、5C. のはじめないし 7C. 以来 (p.244), 教会で歌われつづけてきた聖歌に表現されていると言って、それを引用することによって本書の論述を終える。

O felix culpa quae talem ac tantum meruit habere redemptorem.

WERNER BEIERWALTES : *Identität und Differenz*

Zum Prinzip cusanischen Denkens

Vorträge/Rheinisch-Westfälische Akademie der Wissenschaften :
Geisteswiss.; G220, Opladen 1977, Westdeutscher Verlag.

八 卷 和 彦

著者 Beierwaltes は、*Platonismus und Idealismus* (1972) なる大著の著者として既に熊田陽一郎氏によって本誌 XVII 号 (1975) で紹介されたことがある。この著作は、前者に比すれば言わば小冊子の如きものであるが、その Problematik においてはそれと密接に関わっている。即ち Nicolaus Cusanus (以下 C. と略す) の思想を、形而上学の、とりわけ新プラトン主義の歴史に立って考察すると共に、さらに彼より後の Hegel との関係を考察し、また (とりわけ興味深いことには) Heidegger をも検討の対象にしているのである。この事により、前著では考察が Meister-Eckhart から一足飛びに近代の Novalis, Goethe, Schelling および Hegel まで移動していたという欠落を補い、その論旨をさらに充実させていると考えられるわけである。この点においてこの小冊子は、単に C. 研究書にとどまらない大きな意味をもっているであろう。

先ず〈I〉において著者は、形而上学の思惟がその始まり以来、本質的に Identität と Differenz の関係への問によって規定されており、またこの問は終始 Ein-